Q12 体育における配慮

〈このような状態は自閉症の特性からきています。〉

Aちゃんは様々なこだわりがあるのですが、勝敗には特にこだわりが強く、体育での集団ゲームでは負けるとパニックをなったり、相手チームの子をたたいてしまうなどトラブルも絶えません。またBちゃんは、運動着の下にはシャツを着ないという決まりに従うことができません。Cちゃんは、準備体操等で教師の模倣をする時、手足がちぐはぐな動きになったり、相手チームのゴールにシュートしたり、三塁側に走ってしまったりと、ゲームのルール理解が難しいようです。

このように自閉症の子どもは、こだわりが強かったり、ルールの理解が難しいため、集団で運動することが難しい場合があります。さらに、自閉症の子どもの一部に見られるのですが、不器用だったり、空間の認知力に困難さがあるため、方向や並ぶ位置が分かりにくいということがあります。

〈このような場合の支援　1〉

小学校4年生の知的障害を伴う自閉症の女児。体育の授業では、跳び箱やマット運動など個人の技能的なものはうまくいくのですが、ボールゲーム、鬼ごっこのようなルールのある運動は理解しにくいため、集団から外れてしまうことがあります。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

① 集団の流れの中で並ぶ場所に目印を置いたり、同じ子の後ろにいつも並ばせるなど自分の位置がわかるような手立てを考える。
② しっぽとりなどの鬼ごっこでは、取られたらいやだと思うもの（本人の持ち物へのこだわりを利用する）をしっぽに結びつけてみるとやり方が理解できるようになる。
③ 教師や友だちと一緒に動きながらルールを教える。また、ポートボールの時などは、本人のチームのコートは変えないなどの配慮をする。体操のモデルは教師が本人と同じ向きでやるとよい。

〈このような場合の支援　2〉

小学校3年生のアスペルガー症候群の男児。勝敗への極端なこだわりがあり、短距離走で自分が一番になれないとわかった時点で抜けたり、ゲームで自分のチームが負けると床を蹴ったりすることがあります。このような場合、支援の方法としては以下のことが考えられます。

④ ゲームを始める前にあらかじめ負けるかもしれないことを予告しておく。時間の許す時は、負けた時どうするかを確認してからゲームを開始する。
⑤ パニックを起こしたときは、パニックが収まり、本人から話しかけてくるまで待つ（どうしたらよかったのかを振り返ることも時に必要）。
⑥ 「どうして僕はこうなんだろう」と自己否定をするような言動が見られる場合は、本人の得意な分野を想起させ、自信を持たせるなどの配慮をする。
⑦ 本人の努力が周囲にわかるような手立てを講じる。周囲の理解も本人を育てることにつながる。

学級担任の記録（メモ）

＜項目の利用回数＞

月／日	対象児の問題	教師やクラスの子どもの対応	対応後の対象児の様子